

オンライン交流会 開催報告レポート

2025年4月17日・25日 16:00~18:00

三菱みらい育成財団では、さまざまな立場や地域の助成先・アルムナイの皆さまが集い、学び合い、新たなアイデアを生み出す機会として、オンライン・リアルの交流会を実施しています。4月は2回にわたり、それぞれゲストをお迎えしてオンライン交流会を行いました。



【チェックイン】

前半は助成先・アルムナイのゲストをお迎えしてのオープンダイアログ、後半は4~5人のグループに分かれてのディスカッションという構成で実施。交流会の司会は、当財団の研究員である石黒和己(いしぐろわこ・NPO青春基地創業、理事)が務めさせていただきました。まずはチェックインとして、参加者の皆さんに「初めての方も多いと思いますが、今日は何回目の参加ですか?」「今の気持ちは?」など質問を投げかけ、Zoomのチャットに書き込んでいただきました。緊張がほぐれたところで、「最近書き留めておきたいこと」「この場で話してみたいこと」を文字にして書き出す「ジャーナリング」を実施。自身の問いが明確になってきたところで、いよいよオープンダイアログスタート! (以下、敬称略)



4月17日 オープンダイアログ(まとめ)

ゲスト: 国立大学法人 東京学芸大学 西村圭一教授

カテゴリ-5 東京学芸大学の「高校探究プロジェクト」の詳細は[こちら](https://www.mmfe.or.jp/partners/1109/)から
<https://www.mmfe.or.jp/partners/1109/>

● わちゃわちゃが探究の芽を育てる

石黒: 貴学が取り組んでいる、高校探究プロジェクトについて教えてください。

西村: 教科の探究的な学びと総合・教科横断という二つの部門から成り立っており、活動の核となるのは、「楽しむ」という姿勢です。プロジェクトを山登りに例えると、皆で頂上(ゴール)を目指しますが、誰かが号令をかけたりすると、そのペースに巻き込まれて、疲弊してしまうことがあります。そこでゴールを共有しつつも、各自のペースで進め、時々みんなで集まってわちゃわちゃ議論するというスタイルを大切にしています。

石黒: 「わちゃわちゃ」とは、面白い表現ですね。実施されているプログラムやワークショップにも、その「わちゃわちゃ」は反映されているのでしょうか。

西村: はい。例えば、「ミニ探究教材開発ワークショップ」では、「水」をテーマに、教員が自分の教科の視点で問いを立てます。理科の先生は水の成分に着目し、社会科の先生は水資源問題を取り上げたり、国語の先生は俳句に関連付けたりします。こうした活動を通じて、教員自身が探究の楽しさを体感し、それを生徒に還元することを目指しています。

石黒: 教員が自分の教科の視点で問いを立てることで、新たな発見が生まれるんですね。

西村: そうです。教員がわちゃわちゃ議論することで、教科横断的な視点が生まれ、探究の可能性が広がります。最初はバラバラな視点でも、対話を通じて繋がりが見えてくるんです。このプロセスは、探究の本質だと思います。

石黒: その他、校内に探究文化を広げるための鍵は何だとお考えですか?

西村: 一つは、探究を「壁」ではなく「扉」と捉えることです。壁だと乗り越えなきゃいけないけど、扉ならば、ちょっとかわしてぐると回れば意外と向こうに行けますよね。それぐらい気楽に、柔軟に楽しもうという発想でやっていると、探究文化は芽吹いていくのではと考えています。

石黒: 最後にメッセージをお願いします。

西村: 最近気になっていることなのですが、ある高校生がアンケートに「途中から、私の探究ではなく、先生や学校のための探究になってしまった」と書いていたので、詳細を聞いたら、探究の成果で総合型選抜を受けさせたい学校側の意向が強い、という話だったんです。大学側から言わせていただければ、自分の意志による探究と“やらされ探究”では、生徒の熱量が全然違うので、面接をすればすぐに分かります。高校における探究は、教員や生徒が共に学び合い、多様な価値観を知ることには意義や価値があります。そうした場づくりのために、生徒と先生はもちろんのこと、大学生や多様な立場の方が参加できるプログラムやワークショップを企画しているので、ぜひ我々の取組みに注目いただければと思います。



4月25日 オープンダイアログ(まとめ)

ゲスト:認定特定非営利活動法人カタリバ ディレクター 横山和毅氏

カテゴリー5 認定NPO法人カタリバ「高校生に意欲と創造性を届けるための
「伴走力向上」と「校内推進体制づくり」を目指した伴走型研修」については[こちら](https://myprojects.jp/article/info/startuplab_2025_release/)から
https://myprojects.jp/article/info/startuplab_2025_release/

● 先生たちの「探究スイッチ」が入るきっかけとは？

横山:皆さんにとってカタリバといえば、「全国高校生マイプロジェクトアワード」の方が馴染みがあるのではないかと思います。私は2024年度から「探究スタートアップラボ」という事業を展開しています。「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発や、推進を担うコアチームづくりを目指す高校教員向けプログラムで、参加校は管理職含む3名以上での参加が条件、年3回の対面研修+オンライン個別相談会を実施している点が特徴です。

石黒:どのようなタイミングで参加されているのでしょうか。

横山:大きく3パターンに分かれます。1つ目は、「総合的な学習の時間」と何も変わらない形で進めてきて、これではいけないと感じている学校。2つ目は、「総合的な探究の時間」に3年間取り組んできたけれど、カリキュラムの見直しや組織化が必要だと考えている学校、そして3つ目は、統廃合や新設校として新しいカリキュラムをゼロから作りたい学校です。どの学校も共通して抱えている課題は「組織体制をどう整えるか」という点です。

石黒:プログラムに参加した先生方が「探究」に対してスイッチが入るきっかけはどのようなときなのでしょう。

横山:まず1つ目は「探究」が何なのかを丁寧にインプットすることです。多くの先生方が探究について具体的に教わった経験がなく、得体の知れないものだと感じています。そのため、最初に探究の意義や具体像を共有し、共通認識を作ることが重要です。2つ目は、他校の事例や視察を通じて「自分たちの学校でもできるかも」と実感してもらうことです。視察や他校の事例を知ることで、先生方が自然と巻き込まれていく姿をよく見ました。

石黒:このプログラムはどのようなプロセスを経てつくりあげてきたのですか？

横山:プログラムを形にするまでに2年ほどかかりました。最初は福島県内の複数校に声をかけてプロトタイプを試し、フィードバックをもらいながら改良しました。また、学校の先生や教育委員会の指導主事の方々にヒアリングを重ね、現場でのニーズや制約を理解することにも努めました。企画書は第10号ぐらいまで作りましたね(笑)

石黒:その過程で重要だと感じたポイントは何ですか？

横山:学校としての目指す方向性や意義を明確にすること、その学校や地域特有の歴史や文化、建学の精神などを掘り下げることです。これらを基にカリキュラムを設計すると、その学校ならではの探究が生まれやすくなります。

石黒:非常に興味深いポイントですね。このプログラムがさらに多くの学校に広がることを期待しています。

【ブレイクアウトルームディスカッション&クロージング】

オープンダイアログ終了後は、4~5人のグループに分かれ、ファシリテーターと記録係を決めたうえで、ディスカッションを実施しました。自己紹介、今取り組んでいること、前半に書き出したジャーナリングの内容やオープンダイアログについての感想、各自が抱えている問いに対して質問し、語り合う…。あっという間にディスカッションは終了。「時間が足りなかった」「この問いに対してもっと深めたかった」という声もチャットから聞かれました。ぜひこの続きはSlack(下記参照)をお願いします！

最後に当財団の常務理事である妹背正雄より閉会のあいさつをさせていただきました。平日の夕方にもかかわらず、4月17日は51名、25日には53名の方にご参加いただきました。皆様、お忙しい中、ありがとうございました。次回の交流会にもぜひご参加ください！



4月17日(左)、
25日(右)の
参加者の皆さん

ダイアログの記録動画を ご覧になれます

上記はダイアログのまとめとなります。4月17日・25日の記録動画は「助成先・アルムナイ専用ページ」、もしくは下のQRコード(専用ページへのログインが必要になります)からご覧いただけます。詳細をご覧になりたい方はぜひアクセスください。

※当財団の助成先、もしくはアルムナイの方のみご覧いただけます。

※<https://www.mmfe.or.jp/partnersonly/video/>

